

# 日本幼児保育史の研究



## 一、創成期の保育施設

創成期のすがたは朦朧としていことが多く、わが国の最初の保育施設もまたこの例にもれず明白でない。

従来は明治九年にもうけられた東京女子師範学校附属幼稚園が一番古いといわれてきたが、それより前に、京都や横浜に二、三の保育施設ができていた。このうち横浜の「亜米利加婦人教授所」は外国人の設立したものであるが、京都の柳池校に附設された「幼遅遊嬉場」はわが国の人がつくった公立のものである。このほかにも京都などに一つか二つ保育施設がもうけられているかもしれないが、よく分らない。

また維新以前の保育施設として京都の幻心という人が隠居した後二、三歳から七、八歳ぐらいまでの子どもをあつめて遊ばせたことが、安永二年に公刊された永井堂亀友の「小児養育質気」(上野園書館蔵)という本にかかれており、わが国の幼児保育施設は古くは江戸時代にさかのぼることができるといえる。

すなわち「小児養育質気」の巻之五によると、京都の中京姉小路に住んでいた布袋屋徳兵衛という人がその子に世帯をゆずり、幻心

## 日本保育学会共同研究小委員会

### はじめに

日本保育学会では昭和三十一年に、幼稚園創設八十周年を記念し共同研究として「本邦幼児保育史の研究」をはじめた。研究委員としては、山下俊郎(委員長)、小川正通・莊司雅子・及川ふみ・児玉省・鈴木とく・鈴木信政・竹田俊雄・平井信義・松村康平・村山貞雄・森脇要がこれにあたった。なお研究顧問として海後宗臣氏に依頼し、快諾を得た。

同年七月に第一回の共同研究委員会をひらいて討議した結果、今後の具体的な研究は小委員会をつくって、これにまかせることになった。小委員会の委員は、村山貞雄(委員長)・赤池溥子・岡田正章・安戸健夫・津守真・水野浩志・豊田玲子(三十五年四月より)の七名が委嘱された。なお、小委員会の研究顧問に古木弘造氏の承諾を得た。

それ以後研究の実際は、小委員会の活動にうつったが、小委員会は、しばしば連絡会をひらいて具体的な研究の打ち合わせと研究成果の交換を行なう一方、日本保育学会の大会で毎年研究報告を行なってきた。

今月号から本誌に連載されるのは、以上の共同研究の結果によるものである。なお文章の終りに執筆者名を一応記しておいたが、以下の文章はすべて小委員会の全員が協力して作成したものである。

と改名して町内に隠居した後、子どもを集めて遊ばせることを楽しみとし、自分の家を子どもが遊びまわれるように工夫している。たとえば庭で子どもがけがをしないように注意したり、座敷のうち二畳を白砂にして素焼の人形や彩色の雀鳩をならべ子どもに自由にとらせるようにするなど、細心の注意をはらって近所の子を保育している。

この幻心の保育活動は、動機が子ども好きからであり、目的は幼稚園と保育所を綜合したような、いかにも最初の保育施設にふさわしい形のものであった。(村山)

## 二、横浜の亜米利加婦人教授所

明治初期にあたって、幼児教育の普及に力があつたのは、基督教宣教師であつた。

基督教宣教師による最初の幼稚園は、後に述べるように明治十九年にポートル女史によって金沢にひらかれた北陸女学校の幼稚園、および明治二十年にハウ女史によって創られた神戸の頌栄幼稚園がその最初のものでとされている。幼稚園として開設されて、実際に成功をみたのは、この二つが最初のものであるが、幼児をあつめてその教育を志したのは、もっと初期のものがある。すなわち、明治四年に、メリ・ブライン(Mary Bruyn)、ジェリア・クロスビー(Julian Crosby)、および、ルイゼ・ピアソン(Louis Pierson)の三人の女宣教師によって、横浜山手四十八番地にひらかれた「亜米利加婦人教授所」がこれである。

この施設については、高谷道雄がその著「ドクトル・ヘボン」のなかで紹介しているが、これによると横浜開港にあたって、そこに

発生したラシャメンたちと白人とのあいだに生まれた混血児の問題の解決をかねて、幼児施設を志したものであるらしい。

当時アメリカ合衆国では幼稚園運動が社会問題解決のための社会運動として展開されはじめたときであつて、このような異国における混血児問題は、米本国に訴えるにじゅうぶんな価値をもつたものと思われる。その結果横浜に留の宣教師によって、この実情が訴えられ、それに応じて、三人の婦人がはるばると日本に渡つてきた。

このことについて高谷道雄はつぎのように紹介している。

明治四年八月二十八日米国婦人一致伝道協会から派遣せられた三人の婦人宣教師が横浜に来た。そして山手四十八番館に亜米利加婦人教授所(Mission Home)を開始し、翌五年ブラウン邸の隣二百十二番地に移転して、日本婦女英学校と改称し、益益女子教育につくすことになつた。共立女学校がそれである。

この三人の婦人宣教師とはミセス・メリー・ブライン、ミス・ジュリア・エヌ・クロスビー及びミセス・ルイゼ・エッチ・ピアソンであつた。二百十二番館とブラウン邸の二百十一番館とは隣接し、キダー女史も親しくこれらの婦人宣教師と協力した。現在では、舊ブラウン邸内は共立学園の構内となり教室が建つて居る。彼等婦人宣教師三人が横浜に上陸して最初に日曜礼拝をしたのはヘボン博士の施設所であつた。三人の婦人宣教師の伝道方針は、開港場横浜を中心とした混血児の保護と教育とであつた。横浜に於ける初代宣教師たちヘボン、ブラウン、タムソン、バラは常にこの混血児の問題を苦痛に感じて居たのである。ジェームス、バラは特に日本女史の現状に同情し、この教育機関の設置と、併せて混血児問題の解決について米国の基督教會に訴えた。これに応じて立ちあがったのが米国婦人一致伝

道婦人会であった。そして同会はニューヨーク州アルバニー市の淑女ミセス・ブラインを代表者として外に前記二人の婦人宣教師をその同業者として派遣するに至つたのである。(中略) 当時は切支丹禁制の時代であつたし、外人を敵視していた時代でもあつたから、これら三人の婦人宣教師の努力と苦心はなみなみならぬものがあつた。しかしその献身的な働きには当時の碩学、中村敬宇先生も非常に感激して、自らミッジョン・ホームの生徒募集のポスターをかけた位である。(高谷道男著「ドクトル・ヘボン」一九五四年六月発行 牧野書店 三三七―三二九頁)

つぎに掲げるのは、当時の「亜米利加婦人教授所」の生徒募集広告の全文である。ここに記してあるように、三歳以下の小児は引き受けなかつたようである。ただし、「母ナキモノハ引受クベシ」とあるから、現在の保育所や養護施設のようなものも意図していたらしいことがわかる。しかし、子どもは入塾(宿泊すること)でも、通稽古(通園のこと)でもよいとしており、費用として、宿泊者は、十ドルから十五ドルを、通園者は、四ドルを徴収することになつてゐる。

この広告文にみるように、当時の宣教師が開港場の社会問題の解決に身をもつて當つたことがわかる。そしてその前衛線として、幼児の問題がとり上げられたのであつた。

No 48  
on the Bluff

亜米利加婦人教授所

横浜山ノ手  
四十八番

Mary Pruyn.  
Superintendent.  
Julian Crosby.  
Louis Pierson.  
Assistants

馬利普拉延  
如利亞古羅士倍  
累斯比爾遜

コノ教授所ハ亜米利加婦人伝道会社ニテ設クルトコロニシテ、日本人、外国人ノ差別ナクソノ父母ソノ兒子ヲ教養セント欲スルモノアラバ、コノ教授所ニテ引受ケ世話ヲ致ストコロナリ、三才以下ノ小児ハ引受ケザル事。但シ母ナキモノハ引受クベシ。

凡ソ小児、入塾ナリトモ通稽古ナリトモ、ソノ意ニ任スベシ。然レドモ入塾の方、小児ノ為メニ益アルベキナリ。

モシ小児ノ母、衣服洗濯等、ソノ外ノ事マデモ、一切世話ヲ頼ミ度ハ、女教師コレヲ引受クベシ、モシソノ父、ソノ小児ノ來ランコトヲ欲セバ、ソノ小児親ノ許ヘ省問スルヲ得ベシ。モシソノ父母、教授所ニ來リ、ソノ小児ニ逢ハント欲セバ、午後第四時ヨリ、第五時マデノ間ナルベシ。病氣ノ時ハ何時ニ拘ラズ見舞ニ來ルベシ。

教授及ビ食物居住ノ費用トシテ毎月十元トルラヨリ十五元トルラマデヲ出スベシ。

通稽古ノ者ハ毎月四元ヲ出スベキ事。

〈日本幼児保育史の研究〉

会社ニテ、コノ教授所ノ百事便利ニテ且ツ有益ノ功効アルベキヤウニト心ヲ盡セリ、日本人、外国人ノ差別ナク、懇意トナリタル人ハ随意ニ訪問スベシ。コ、ニ居ル小兒ハ実母ノ如キ親愛ノ心ヲ以テ万事ニ心ヲ付ケ世話ヲ受ルヲ得ルコトナリ  
ソノ他委細ノ事ハコノ教授所ニ来リ教師ニ逢フテ問ヒ給フベシ。

余十餘日 コノ教授所ニ寓セリ。コノ三ノ女教師、何モ親切懇篤ナル人ナリ。現今小兒四人アリテ、教師ノ世話ヲ受ケテ居レリ。実母実子カト疑フルホドニ、相ヒ驩和親愛セリ。一ニハ、智慧生長スベク、二ニハ身体強壯ナルベシト思ハル、ナリ。世ノ父母、モシソノ兒子ノ善キ教育ヲ受ント思フモノ、コノ教授所ニ託シ置カバ、イカバカリカ、ソノ家ニテ育ツルヨリハ善カルベキナリ。

明治四年辛未十月 中村正直識、

(同前三二九〜三三一頁)

なお、これに符合する記事が、「正木護・耶穌教課者報告書」のなかにもみられるので、つぎにあげておこう。正木護は、関信三(安藤劉太郎)とともに、太政官課者として耶穌教員教師のあいだに出入していた人で、小沢三郎の書「幕末明治耶穌教史研究」(後出)に詳しい。

元来静岡県下ハ洋教ヲ学フ者多シ 就中中村敬之助ト云ハ舊幕ノ大儒聖堂ノ長ニテ 頗ル漢學者ニテ威儀正シキ性質ノ由然口ニ近年洋学ニ入り 当所ニテハビヤルソン 従前貯ル漢書類悉ク無用トシテ門人共ニ遺シ 専ラ聖書ニ力ヲ盡シ耶穌教ヲ以テ縣内ノ人々ヲ盛ニ勸ル由 乃チ杉山孫云杯モ同人一指麾ニテ聖書ヲ重ニ学フ由ナリ 己ニ二月下旬中村敬之助一族ノ娘共

三人ヲビヤルソンニ預ケニ来 起臥共同人館内ニテ致シ居ルナリ

元トビヤルソン「ブ

ロエン」クラビス」

ノ三女教師人自他

国共三才己エノ子供

ヲ一ヶ月十五弗ニテ

預リ教授ハ勿論起居

衣服等ハ至迄悉ク世

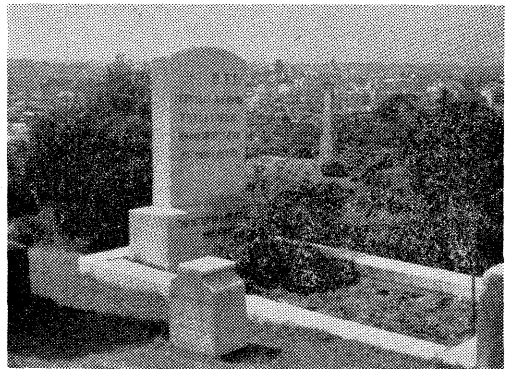
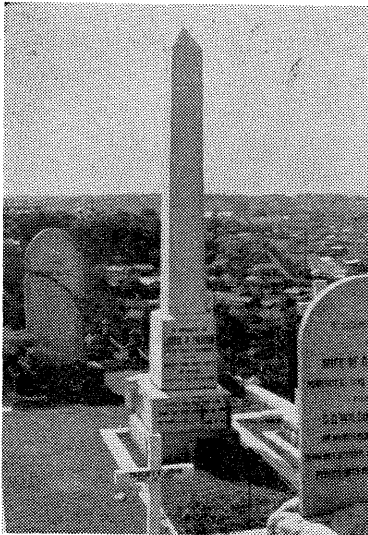
話スル規則ニテ洋人

ノ子或ハ日本ニテ生

マレタル間子或ハ西

ト支那ノ間子杯八十

人余モ居レトモ真ノ



日本ノ子ハ一人モ預ケルモノナカリシカ此度静岡ヨリ来ル三人ノ娘カ日本人ノ預ケ始メルナリ。(三四九頁)

後にわが国の幼稚園の發展に貢献した、東京女子師範学校初代撰理(校長)である中村正直が、この施設と深い関係があったことは興味深く、また後に、東京女子師範学校附属幼稚園初代監事(園長)をつとめた関信三も、ちょうどおなじ頃に横浜の宣教師のあいだに出入していたのであって、この施設のことをよく知っていただろうと想像して間違いない。当時の識者の幼児教育に対する関心は、この頃から醸成されていたと考えてよいかもしれない。

「亜米利加婦人教授」は、はじめラシャメンとのあいだの混血児を対象としたものであったが、実際に始めてみると、混血児問題はそれほど大きな問題でないことがわかり、また当時において、幼児を集めることもむずかしく、翌年の明治五年十二月には、「日本婦女英学校」(後の横浜共立女学校)として、女子教育の道を進んだ。(注)

(注) 文明開化の明治初期にあたって、新知識を吸収しようとして英語を学ぶものは多かった。後に述べる「幼稚二遊戯の園」の画家武村耕鷗女史も、明治六、七年に、ここで英語を学び、また基督教にふれてゐる。

ブライン女史は間もなく病氣のため帰国したが、その後女学校の校長として貢献し、クロスビー女史は、日本における初期の讚美歌の翻訳者として貢献している。有名な子どもの讚美歌「主我を愛す」はクロスビー女史の訳である。(注) 横浜の外人墓地には今もピアソン女史とクロスビー女史の墓が並んで立っている。(写真参照)

(注) ピアソン女史については、山本秀輝著「日本基督教会史」日本基督教会時代初期、その四、二六六頁、二六七頁に、クロスビー女史については、「同書」第五章「日本基督教一致教会時代」その三に記述がある。

(津守)

### 三、鴨東幼稚園 その他

つぎの節で述べるように明治八年になって「幼稚遊嬉場」が設立されるが、これより以前には保育施設は前述の「亜米利加婦人教授所」以外にみあたらない。

しかし伝聞が残っているので、京都に幼稚園が一つあったかも知れない。また書いたものが残っているものとして、名古屋に幼稚園が一つあったようにも考えられるが、これも現在のところ何とも言えない状態である。

#### A、鴨東幼稚園(一八七三年頃)

明治六年に鴨東幼稚園(このような名称をつかっていたかは明らかでない)が、京都の建仁寺附近に外国人によってつくられていたようである。このことについては文献がないので確かなことは言えない。

現在京都市女子大学の附属幼稚園になっている私立京都幼稚園の創立者、岩井栄之助(号を藍水と称した)は明治六年頃に外国人のつくった鴨東幼稚園に通っていたという話を、生前京都私立幼稚園協会長である山名義順に話していたといわれる。岩井栄之助は昭和三十三年に九十歳で亡くなったが、その夫人岩井つたも京都幼稚園の先生をずっとしており、ともに幼稚園教育に熱心な人であった。

山名はこのことについて、「京私幼」につきのように書いている。

「わが京都は、日本の幼稚園教育の揺らんの地であることは、日本の幼稚園史の明らかになっているところでありませう。しか

も、明治八年十二月に柳池校に幼稚遊嬉場が開設されましたが、それ以前に建仁寺境内に外人の経営ではあったが、私立幼稚園（鴨東幼稚園と名づけていたという）らしいものが存在していたと伝えられておりますことは、日本幼稚園史上注目すべきことであります。

〔京私幼〕No. 1 三四・九・一〇号

鴨東幼稚園については、現在のところこれ以上の資料がみあたらないが、伝聞の経路がしっかりした人であり、その頃の京都のふんい気からして、幼児保育施設が実際に存在していた可能性が考えられる。ただし京都で山名のほかに若井の話をきいた人をさがしたが、現在のところはまだみつからない。（村山）

### B、伊沢修二の保育施設（一八七三、四年）

愛知師範学校の校長をしていた伊沢修二は、明治六年に愛知師範学校に幼児保育施設を設けたことを「日本の小学教師」の第九十七号に書いている。

これが事実とすれば、わが国の人によってたてられた最初の保育施設（維新以後の）は明治六年にできたことになる。

貴族院議員になった伊澤はこのことを明治四十年十二月に発行された「京阪神連合保育雑誌」（愛珠幼稚園蔵）に、「幼稚園の一新紀元」という題の論説で載せており、そのなかで、「幼稚園に就ては実は自分が始めて教育界に導入った頃即ち明治六年に愛知師範学校に於てその端緒を用いたと申しても宜い」と言っている。

すなわち彼は幼稚園という名はつかわなかったがフレーベルの幼稚園に似たことをはじめたとして、つぎのように説明している。

その当時に於ては無論幼稚園と云ふ名は無かつたけれどもグリコーゲルと云ふ人の著しし幼稚園の書物を見て自己流にして兎も角もフレーベル式の幼稚園に類似した仕事を創めたのである」（二頁）

この内容は、彼がわが国で行なわれている幼稚園教育について批判した論文のはじめに述べられているものであるが、最初に

拝啓陳は京阪神連合保育会雑誌第十九号一覽致し候処其中に昨年十二月老生其地方漫遊の際貴会員の為講説せし幼稚園事業と題する記事有之全体甚だ不十分なるのみならず事実を轉倒せしと覚ゆる所も有之甚だ迷惑致し候に付次号を以て右全文を取消の上別冊日本の小学校教師第九十七号に記載有之候幼稚園の一新紀元と題する論説を更に御轉載相成度此段御照會に及候也  
明治四十三年九月十日  
伊澤 修二

大阪市保育会長

大村芳樹殿

として掲載されたもので、単なる講演の筆記ではない。

この文章からだけ察すると、明治六年に幼稚園ができたように思われる。しかし彼がここで「蝶々々々」という歌は愛知附近にある童謡にもとづいてつくったものであると述べているのに関連して、この歌について伊沢が文部省に報告している文章をみると、保育施設が存在に疑問がもたれる。

すなわち彼は、さきほどの文につづいて、つぎのように言っている。

その当時為したもので残って居るのはその時用ひた唱歌がある即ち今日まで伝って居る「蝶々々々菜の葉に留れ菜の葉が飽い

たら桜に留れ桜の花の栄ゆる御代に遊べや遊べ」と云ふ歌である、この上の句は全く愛知邊にある童謡に基づいて出て来て居るので、只「桜の花の栄ゆる御代に」と云ふところ以下は後世新時代に適用するように野村秋足（当時愛知師範学校国語科の教師）と云ふ歌学者が之に附加へて、さうして今日まで傳つた「蝶蝶々々」の歌で出来たのである之が抑も幼稚園のことに自分が考へを起した初めてその後亞米利加に參つた時にも随分多数の幼稚園も見、それから日本に自分が帰つて来た頃には既に幼稚園と言ふものが出来て居つた、（一一二頁）

一方彼が明治七年の学事報告として文部省にだしたものをみると、つぎのようであり、幼年教育のことを述べ、保育施設には触れておらず、下等小学（二年〜四年生）の教科の内容として「蝶蝶々々」の歌を教えたことを言っている。

愛知師範学校年報

明 八・二・二六

伊澤 修二

将来學術進歩ニ付須要ノ件

唱歌 嬉戲ヲ興スノ件

唱歌ノ益タルヤ大ナリ

第一、知覚心程ヲ活潑ニシテ精神ヲ快樂ニス

第二、人心ニ感動力ヲ發セシム

第三、発音ヲ正シ呼法ヲ調フ

以上ハ幼年教育上唱歌ノ必欠ク可カラサル要旨ノ概略ヲ挙クルノミ其細目ノ如キハ蝶々此ニ辯セス我文部省早ク此ニ見アリテ小学教科中唱歌ヲ載スト雖トモ未タ実ニ其科ヲ備フルモノア

ラス今吾輩西洋ニ於テ著名ナル教育士フレイベル氏其他諸氏ノ論說ニ從ヒ先本邦固有ノ童謡ヲ折衷シテ二三ノ小謡ヲ制シ日ヲ累ネ年ヲ積テ大成全備ノ効ヲ奏セン事ヲ期セリ。即チ其一二例ヲ左ニ示ス

唱歌ハ精神ニ娛樂ヲ与ヘ運動ハ支体ニ爽快ヲ与フ此二者ハ教育上并ヒ行ハレテ偏廢ス可ラサルモノトス而シテ運動ニ數種アリ方今体操ヲ以テ一般必行ノモノト定ム然レトモ年齒幼弱筋骨軟柔ノ幼生ヲシテ激動セシムルハ其害却テ少カラスト是レ有名諸家ノ確說ナリ故ニ今下等小学ノ教科ニ嬉戲ヲ設ク即チ左ノ因ニ因テ其一二例ヲ示明ス

因（略ス）

榊 唱歌

榊ヤ榊 榊ノ花カ用イタ中ノ心マテ開イタ。榊ノ花ハ萎ム時モアラウカ開ケタ御代ハ八千代ノ春マテモ萎ム時ハアラン

胡蝶 唱歌

蝶々蝶々、菜ノ葉ニ止レ、菜ノ葉ニ飽タラ桜ニ遊ベ桜ノ花ノ栄ユル御代ニ止レヤ遊ベ遊ベヤ止レ

技態

（文部年報）

以上の結果、伊澤修二が附属小学校と別に保育施設を明治六年につくつたのか、小学校の低学年（この頃は学齡以前の幼児も小学校に入っていた）に「蝶蝶々々」の歌を教えたのを記憶がいいたものかよく分らない。そこで実際に名古屋市にある愛知学芸大学附属幼稚園に村山が行つて調べたが資料を発見できなかった。

なお、「入澤教育辞典」（昭和七年発行）には、伊澤修二（二五一

一―二五七七年)の項に、「……、同七年三月歳二十四にして愛知県師範学校長に任ぜらる、当時『教授眞法』なる書を著す。同校の附属事業として幼稚園を作り、そこに於て初めて唱歌を教授した。之我國の学校に於ける唱歌教授の嚆矢である。……」と述べられている。これによると明治七年に幼稚園をつくったことになる。

(村山、宍戸、岡田)

#### 四、京都の幼稚遊嬉場(一八七五年)

わが国の公立の保育施設のうち最初のもは、京都の柳池学区にもうけられた「幼稚遊嬉場」である。

幼稚遊嬉場は、開設後一年半あまりで十年頃には閉鎖の止むなきに至り、しばらく中断してしまつたが、明治初年に、京都市のひとが幼児教育の重要なことに着眼していたことは注目し得る。

維新を成就した新政府は、一刻も早く先進諸国の列に加わろうとして、国民の教育に非常なちからをそそぎ、明治四年に文部省を設け、五年の「学制領布」や六年の「被仰出書」で教育の重要性を説き、国民教育について啓蒙をはかった。

すなわち、「学制領布」には、

……区内の人民六才以上の男女は総て小学校に入る者とし、学に就かざる者は其の理由を学区取締に申出ずる事、小学校は之を分ちて尋常小学校、女児小学校、村落小学校、貧人小学校、小学私塾、幼稚小学校等とし……

と述べられており、太政官の「被仰出書」には、「必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめざるべからざるものなり」とあり、新政府の教育への熱意がなみなみならぬものであったことがうかが

われる。

「学制領布」でいう幼稚小学の性質は幼稚小学は男女の子弟六才迄のものが直ちに実現できなかったように、幼児教育に着眼しながら「幼稚小学」も実現しなかった。しかしこの頃、村田文夫の「繪入子供育草」(明治六年)、土居光華の「母の導記」(明治七年)、近藤眞琴の「子育ての巻」(明治八年)、近藤鎮三の「母親の心得」(明治八年)など、相ついで出版されているところから、一般の風潮として幼児教育への関心がおこつてきていたことが推察される。

わが国の人が作つたものうち最初の公立幼児教育施設である「幼稚遊嬉場」は、このような風潮のなかで開かれた。

しかしとくに京都に、幼稚遊嬉場が設立されたのはそれだけの背景があつたわけである。すなわちこの遊嬉場は、東京女子師範学校附属幼稚園のできる少し前に、何かポツツとできてすぐ消えたというように簡単にかかるく考えられがちであるが、もっと重要な意味をもつて成立したものであつた。

なぜ、京都に幼稚遊嬉場が開かれたかは京都市の歴史と関係するところが大きい。

千数百年の長きにわたつて、京都はわが国の首都であり、つねに文化の中心の地位を占めてきた。政權が實質的には武家の手に入り、関東が政治の中心となつて繁栄していったにせよ、天皇のおられる古い文化をもつ京都の人びとの矜持は高いものがあつた。

したがつて、幕府がおかれ、政權が京に復帰したものの、まもなく天皇が関東に移り、そこが文化や政治の中心となることになつたとき、京都市民の驚きと悲歎は想像に絶するものがあつた。その市民の動揺にたいして、皇室は多額の米や金を下賜し、一方、市民は



それに感謝すると同時に、京都を維新後も文化都市としてますます発展させようとして努力した。すなわち、皇居が明治二年京の地を離れることになったので、京都の人びとは、新たな発展の分野を教育振興というところに求めた。当時の事情について「柳池校七十年史」(柳池幼稚園蔵)には、つぎのように記されている。

然るに時偶々東駕東幸の事決し、市民は驚愕失望殆ど為す所を知らざるものあり。しかれども、愾慮慙懃舊都の衰頹を軫念あらせ給ひ、京都市一般に現米一萬石、金拾萬兩を下賜し給ふ。此に於て官民深く感激し、誓つて舊都の面目を維持すると共に其の進展を策せんことを期し先づ教育の普及上進を圖り、人材を養成して實業を振興し、富力を増進することを以て急切第一の施策となすに至り即ち千障萬難を排して之が遂行に努めたりしが其功空しからず 京都は全國に率先して教育機関を創設し範を全國に示せしのみならず中央政府をして一時其標準を本府に需めしむに至れり (二六頁、一七頁、昭和十七年六月、京都市柳池国民学校 京都市柳池町内会聯合會發行)

このような事情を背景として、当局者は、室町時代から存在した対立している町組織の統合をはかり、小学校設置の努力をつづけた。この結果、全國に卒先して明治二年五月に小学校の設立をみた。「京都市立学校園沿革」(昭和三十一年三月京都市教育委員会発行)は、当時の模様をこうのべている。

・遂に同年八月市中を上京、下京と各大組とし又上京に四十五番組、下京に四十一番組を区劃し、学校設置の緒をつくつたのである。かくて同年十一月、右の内三十三番組より小学校建

設を申し出て自餘の各組も相次いで上申するに至つて学校建設の機運が漸く熟して来たので、同年十二月創設費用として金約八百円を各組に交はし、内半額はこれを下賜とし、半月はこれを十ヶ年賦を以て返還せしめることとし、更に翌二年一月、番組の整理となし上京を三十二番組、下京を三十三番組計六十五番組と改められた。ここに於て、学区の基礎が略々確立された。かくて小学校設置の準備が着々進むに従つて明治二年二月教師を募集し、同年五月、教則を定めたが同年五月二十一日、上京第二十七番組小学校(現柳池小学校)を全國の魁とし下京第十二番組(現豊園小学校)下京第十三番組小学校(現開智小学校)が相次いで開設せられ、翌三年末までには市内六十四校の設置を見るに至つた。(二頁)

このように初期の小学校は、文化都市としての伝統を栄えさせていく目的をもっていたために、単に子どもが四科目を学んで来る場所にとどまらないで、社会的な施設としての役目ももっていたが、このことも保育施設をつくる一つのいとぐちとなつたものである。「柳池校七十年史」には、つぎのように述べている。

——尚、当時の学校経営趣旨を纏ぬるに学校を以て単に教育を施す場處とするのみならず、組内自治中心となし、公衆會同の場處となすは勿論、保安警察並に衛生施設上の屯所にも充て教育施設並社会施設全般の機関として活用せんとするにありたり、(二十頁)

以上、きわめて長いあいだにつちかわれた都びとの底力と文化的な教養が教育熱ということにあらわれ、東京府よりもさきに小学校をつくることになったが、さらに八年に最初の幼児保育施設を創設

するに至った。この保育施設は、その翌年つくられた東京女子師範学校附属幼稚園のように政府によって作られた（したがって別に東京でなくても出来た）ものでなく、民衆の自然の力がみられるものであり、公立ではあるが現在わが国の大多数を占める私立幼稚園の開拓者という意味ももっている。

それどころか、先ほど京都の人びとの教育熱のあらわれの一端だと言ったが、偶然あらわれた単なる一端でなく、その最も高い峯であり、あらわれるべくしてあらわれたものであるということができ

る。  
すなわち、明治初期の京都の人びとは、自分たちの民意をもち上げて、これを組織し、制度化することがうまく、教育熱を上手に実を結ばせ、以上のように早くから小学校をつくったが、なかでも柳池校は鳩居堂の主人が計画して組内の少年を集めて、小学・三字経・論語・日本外史などを教えていたのがもとになり、明治二年五月二十一日に上京二十七番組小学校として文部省の開設や政府の教育奨励に先立ってできたわが国最初の小学校であった。これは、四書五經心学道話などを教えていたことから随分古いことが分るが、このわが国最初の小学校はさらに明治六年には女紅場をもうけたり、役場を学校の一部につくるなど、庶民教育の総本山となろうとしたことが察せられる。

ここに、京都市民のエネルギーの結果として、いわば下から盛り上がった、しかも一般大衆の庶民教育としてわが国のモデルスクールになろうとした学校があらわれたわけである。そしてこの学校が、ゼルマン地方には大小学のほかに学齡未満の幼児のための幼稚園がつくられているから、庶民教育の総本山である自分たちの学校でも当然これに注意して幼稚園教育をするべきではないかという考

えで、わが国民による最初の保育施設を開設したのであった。

すなわち明治八年十二月に、上京第三十区において小学校の一隅に遊嬉場を設け学齡に達しない幼児を保育した。その二年前、すなわち、六年に上京第三十校は校舎を移転し、柳池尋常小学校となっており、遊嬉場はそのなかに附設された。

この柳池校附設幼穉遊嬉場の開設の動機と、それがどのようなものであったか、については「幼穉遊嬉場概則」によって知ることができるが、ここにみられるように関係者は「本邦小学の嚆矢」という榮譽を幼児教育のうえにも獲得すべく創設を意図している。

#### 幼穉遊嬉場概則

側ニ聞、五州中文運隆盛ヲ以、称セラル、日耳曼地方ニハ大小穠ノ外、教所ノ嬉戯場アリテ学齡未滿ノ稚児ヲ出シ、遊嬉娛樂ノ中ニ於テ發明ノ能力ヲ誘導シ他年就学ノ基ヲ立テ女師ヲシテ之レヲ教育セシムト。其方法ノ善良ナル未悉サスト雖モ、洵ニ羨思スル所ナリ、而我柳池校ノ若キ維新以還、本邦小學ノ嚆矢ニシテ其設ケ府下六十有余校ニ先チ從テ成業ノ徒モ多ク、嘗テ府庁ノ恩賞ヲ蒙リ区内ノ榮トスル所ナレバ猶注意ヲ加ヘザルベケンヤ彼我制ヲ異ニスル所アリ教育ノ方法未ダ備ラザレドモ、其一端ヲ挙ゲ以他日ノ大成ヲ俟ツ。概則左ノ如シ

一 下等小学校教育方ノ大概ヲ知り得タル老實ノ婦人一名ヲ債ヒ、仮ニ教師トス

一 校内ノ一隅ヲ以テ嬉戯場トナシ稚児ノ学齡ニ至ラサル者ハ年齡ヲ問ハズ、陥頭街上ノ遊ビニカヘ此ニ入場シ或ハ兄弟或ハ姉妹乳母モ保傳モ共ニ來テ隨意ニ遊戯シ然シテ教師ノ指揮ニ從フベシ

一 稚児教育ノ法ニ於テ其宜ヲ得ル極メテ難シ、課業ヲ設ク  
レバ厭苦倦却ス。且稚児ノ性タル定意ナク多時一所ニ居ル  
ヲ欲セズ。故ニ課業ヲ設ケズ、動惰ヲ問ハズ、進退出缺モ  
亦之ヲ制セス。

一 稚児ノ発才ヲ誘導スルハ玩具ニアルノミ、有益ノ具ヲ弄  
セシメ、而教師之ヲ指示シ、日何、日何、ト稚児ヲシテ聲  
ニ応ゼシメ、随ヒ示シ隨ヒ応ジ、數回之ヲ行ヒ記得スルニ  
至テ亦他品ニ遷ル。其齡ノ漸ク進ムニ從テ少ク言語ヲ解セ  
バ品物ノ功用ト性分トヲ講釋シ、児ノ見聞ヲ宏ニス。

一 場中布置スベキ玩具之レヲ大ニ備ント欲セバ、天造ト人  
工トノ種類タダ數百品ノミナラズ、之ヲ少ニセバ教育ノ功  
鮮シ。於是聊斟酌ヲ加ヘ給與スル所如左。

一 立方形小片大幾百箇

一 家屋城樓等ヲ模造シ發才ヲ試ルノ具トス

一 平方形ノ小木牌幾百箇

一 單語函ノ如キ草木鳥獸ヨリ食物器財ニ至マテ一枚一

圖ヲ畫シ(五十音圖モ有ベシ)云何ヲ諭スノ具トス

一 賢人名媛ノ行跡ヲ圖畫セル繪本又小学入門ノ如

キ、品物ノ形似ヲ知ルベキ繪本幾十冊。

一 稚児ハ繪ニ就テ目ヲ怡バシメ教師傍釈ヲ加ヘテ実

業ヲ知ラシムルノ具トス。

右齊整ニアラズト雖モ群児ノ街頭ニ飄遊シ、鄙野ノ惡弊ヲ被  
ルナク所謂遊嬉中ニ於テ英才ヲ養ヒ庶幾クハ他日勉學ノ基トナ  
ランカ。尚之ヲ實際ニ施シ而後闕漏ヲ補フベシ

明治八年十二月 柳池校(柳池校七十年史三八頁~四〇頁)

この「概則」にみるように、一般に幼児教育が考えられず、幼児  
が放置されていた当時を憂い、「群児ノ街頭ニ飄遊シ、鄙野ノ惡弊  
ヲ被ル」ことのないように、「遊嬉中ニ於テ英才ヲ養ヒ庶幾クハ他  
日勉學ノ基」をつくりたいと考えていた。これは必ずしも独創にな  
ったものではなかったが、わが国最初の幼稚園である幼稚遊嬉場は  
偶然早くできたというようなものでなく、京都市民の大きな理想の  
あらわれとしてできたものであるといえる。

なお幼稚遊嬉場の後身として、二十六年に私立の柳池幼稚園がで  
きており、現在は京都市立柳池中学校の一隅にあるが、遊嬉場時代  
の資料はまったく残っていない。幼稚遊嬉場については、以上あげ  
た文献のほか、「京都小学五十年史」(大正七年発行)がある。  
(村上、豊田)

## 日本保育学会第14回大会

会期 昭和36年5月20(土)~21(日) 日

会場 お茶の水女子大学

## 第十回教育実際指導研究会

会期 昭和36年6月2(金)~4(日) 日

会場 お茶の水女子大学付属幼稚園

主催 お茶の水女子大学付属幼稚園

幼児教育研究会

予

告